

## 青年期における「母」イメージ —— 大学生を対象にした調査資料を基に ——

甲南大学学生相談室 友 久 茂 子

### I. はじめに

「母」ということばを聞く時、私たちはいったいどんなイメージを描くのだろうか。どこか甘く、なつかしいイメージや、何とも煩わしいお節介なイメージを抱く人もあるだろう。筆者は現在、学生相談室のカウンセラーとして、様々な悩みを抱えたり、自分の生き方に迷いを感じたりして、相談室にやってくる学生と向き合う毎日を送っている。悩みの内容は様々であるが、面接が進むにつれて多かれ少なかれ、親の生き方や親との関係、親の養育姿勢にまで話が進んでいく。その場合、一人一人の学生がそれぞれの母親イメージをもち、単に「やさしさ」や「あたたかさ」といったことばでは表現しきれない多様なイメージを抱いているのではないかと考えるようになった。

しかし、「母」という言葉は母性重視の伝統を持つ日本の社会では、時代や社会の要請に答える形で、いつのまにか郷愁的イメージだけがひとり歩きしはじめた。そして、ひとり歩きをしはじめたイメージは快い響きをもっていたため、私たちは現実に目をつぶり、自分たちのイメージにあった母の存在を要求するようになった。けれども実際には、現代社会がもつ母のイメージは傷つき疲れはて、ぼろぼろになっている。本当は一面的に快い響きをもった、そのイメージこそが「おかしい」と考え直す必要がある。もし「イメージが病気になったり、健康である」という言い方が許されるとすれば、私たちのこの社会が持つ「母のイメージが病んでいる」と考えるべきではないだろうか。

### II. 問題及び目的

渡辺寛(1993)は「母をなくした日本人」の中で、

母とは何かを「子供や弱い立場に置かれている存在を思いやり、どこまでもその可能性を信頼し、大切にすることで、自分の可能性もまた開かれていくことを願っている母的な存在の一切」と定義付け、その不在を問うている。しかし、それは渡辺が、「母」という存在を「思いやり」や「可能性を信頼するもの」としてイメージした結果であり、実在する「母」或いは「母的」存在は決して、そういったものではなく、時には子を「疎ましく」思ったり、「憎らしい」とさえ感じ、否定し破壊するものでもある。つまり、渡辺のイメージする「母」という存在は現実にはもともと存在してはいない。「思いやり」と「可能性を信頼するもの」というイメージを母たちに背負わせているに過ぎない。このようなイメージにあった母が現実に存在しなくなったからといって、それを母の「不在」としてとらえてしまっては、実在する母の存在を否定することになりはしないだろうか。むしろ、病んでしまったイメージを憂えるより、新しいイメージを「母」たちに与えることが必要ではないか考える。そうすることによって初めて「母であること」と「自分の可能性を開くこと」とがパラレルな関係として生きることが可能になるであろう。本研究は「母」イメージが病んでいる現在、子供たちが「母」をどのような存在とイメージしているかを調査し、新たな母イメージを作り出そうとする試みである。

日本文化における母親研究としては山村賢明(1970)が、テレビドラマや教科書にあらわれた「お母さん」を取り上げることによって、日本の文化の中で母親がどのように観念されているかを分析し、「母親は人間にとっての原体験であり、宗教

的な機能を演じ得る」と結論付けている。これは今まで研究対象の価値さえ与えられなかった母親の問題を、真正面から取り上げたという意味で画期的な研究である。しかし、その結果、母親の存在に崇高なイメージを与えてしまい、結果的に、明治以降かなり政策的に作られた母性イメージを実証することになってしまった。そして、その後の母親研究が一方向的に母親のあるべき姿を要求するものとなり、「母原病」や「母性喪失」といった言葉が育児や教育の現場で公然と使われはじめるようになったことは皮肉なことである。

三木アヤ(1981)は深層心理学の立場から、絵画や小説の中の母イメージを取り上げ、その崇高なイメージを認めながらも、「一億の人には一億の母イメージがある」と主張しているが、一方で、臨床的には母イメージがマイナスであることはその人の心の問題を大きくすると述べ、母イメージがプラスであることが心の健康にとって不可欠であるかのような主張をしている。こういった主張は「母親の無償の愛情」を一方向的に要求することになりはしないだろうか。

やまだようこ(1987)は、女子大生に対して母親関係をイメージ画として描く調査を行い、その分析の結果「包む母と入れ子の私」という基本的なイメージの存在を認めている。そして、イメージとしての母親像は現実の母と子の人間関係そのものではなく、それをはるかに超えた「母なるものと私なるものである」と述べ、そのイメージを現実の母子関係に適用したり、包むものとしての機能を強調して「母性愛」を賞賛する方向にむかうことの危険性についても言及している。しかし、「包」という字は字源から考えると「子を見ごもっているさま」であり、「はらむ」「身籠もる」と同意味と考えられ、従来の母性を含むものととらえられる。従って、イメージ画を「包む」という言葉にかえるときにすでに、意識的であれ無意識的であれ、やまだ自身の「包む母」への賞賛が入っており、「包めぬ母」への否定を考えざ

るを得ない。やまだ自身も、そのことが「母をも子をも不幸にする」と言及しているからには、「包む」という言葉の使用はより慎重であることが望まれる。むしろ、こういった無神経な言葉の使用こそが、「母親への無償の愛」を無限に要求するような社会的風潮を生み出すことになるのではないだろうか。

母イメージに対する海外との比較という意味で注目されるのは、18才から80才までの全米千百人の母親にたいして調査した「母親」(1989)である。それによれば、アメリカの母親が持つ母イメージは、「完璧な女性として生きるためには完璧な母でもあらねばならない」という強迫的な思いのようである。これは日本の母イメージが、「絶対的な子への思いやり」や「無償の愛」といった崇高なイメージであるのとは相当異なっている。しかし、どちらも「良き母でなければならない」という強迫的な思いを母親に押しつけ、現実の母の姿とは隔たったものであるという点では一致している。つまり、筆者のいう「母イメージが病んでいる」という意味では一致しており、その生の声が伝えられたことは母親研究にとって有意義なことである。

「母性の研究」(1988)で子を持つ母の側から母性を問うた大日向雅美(1992)はその後、子を持たない女性の苦悩を通して日本の社会が持つ母性の意味を問うている。その中で、日本の母性イメージは政治的社会的に操作されたものであり、神聖化された母性や母イメージを強要する文化が、母である人生にとっても母でない人生にとっても負担が大きいことを指摘している。と同時に、操作されたものであることに気付かず、操作の波にたやすく乗せられてきた女性たちの生き方に「はがゆさ」を訴えている。その「はがゆさ」については筆者も全く同感ではあるが、現実には女性たちは何に気付くことによって、操作に流されることからまぬがれるのだろうか。母性が操作されたものであり、母イメージが社会に要求される形で歪め



られたままであることが実証されながら、では現実の母性とは、母イメージはどうであるのかについては全く手つかずのままである。神聖化された母イメージを持つ文化が、女性を生きにくくしているとすれば、その文化が自然な姿に変化してゆくための研究こそ今要求されていると考える。つまり、自然な母の姿を母イメージとして再びイメージ化してゆく努力が必要であろう。

もともと筆者は自らの母親体験をふまえて、「母の生き方」や「母の心の変容」といったことに深い関心を抱いてきた。しかし、「母」という存在は子を生み育てるという関係の中で存在するのであり、「子」との関係抜きにしては、その存在もありえない。従って関係概念としてとらえることが必要であろう。しかし、抽象的な関係のみを論じてみても、生きた「母」の存在に迫ることはできない。そこで、本研究では「母」であることを規定する「子」が、具体的にどのように「母」をイメージしているかを調べることによって「母」イメージを明らかにすることを目的としている。

大学生を調査対象としてことについては、筆者が授業を担当しており、立場的に協力が得やすかったことと、大学生の場合、適切な言語化が可能であると考えたことが大きな理由である。しかし、同一性の確立期にある大学生が母親像をイメージすることによって、今までほとんど意識することがなかった母の存在を改めて認識し、そうすることによって自らの姿を明確にしてほしいという、筆者のひそかな願いがあったことを付け加えておきたい。

ところで、イメージという絵画的なものを言葉にかえてしまうことには、ある種の危険性が伴うような気もする。つまり、ある事物を言葉にかえたときに、そのイメージは変形してしまうかもしれないし、言葉そのもののイメージが、すでに個々の人間によって異なるとも考えられる。そういったイメージが持つ特性を補う意味で、筆者は

できるかぎり多数の語による表現が、より客観性を持たせ得ると考え、4種類の品詞を各五位まで答えるように要求した。

### Ⅲ. 方法

① 関西の私立大学と私立短大各一校に於いて、筆者が担当する心理学講義受講者に対して授業のおわり30分間を利用して調査した。調査時期は1993年7月である。② 記名欄は特に設けず自由にしたが、不真面目な回答を避けるため、「名前を書いたものは出席と認める」とした。③ 調査用紙の内容は次のふたつである。「1 母のイメージについて、形容詞、副詞、名詞、動詞の各品詞に対して、一位から五位まで強くイメージする語を順に自由に記述する。」「2 母と自分との関係を簡単な絵に描く。」④ 質問の仕方については事前に五名の大学生に集まってもらい、予備調査を行なった。その結果、形容詞以外は、イメージがわきにくく、ほとんど答えることができなかった。そこで副詞には「繰り返しのことば」名詞には「動植物の名、自然現象、人間の創造物」動詞には「母の行動」と説明を付けた。⑤ 実際の調査用紙は図1のとおりである。

＜調査1＞		母のイメージ	
		年齢:	オ 性別:男・女
[1]「母」のイメージについてお尋ねします。強くイメージする順に書いてください。			
A 「母」という言葉を形容詞で表現するとしたら、どんな言葉でしょうか。			
1(	2(	3(	4( 5( )
B 副詞(繰り返しの言葉)ではどうでしょうか。			
1(	2(	3(	4( 5( )
C 動植物の名、自然現象、人間の創造物等名詞で表現するとしたらどうでしょうか。			
1(	2(	3(	4( 5( )
D 動詞ではどうでしょうか。「母」の行動をイメージして書いてください。			
1(	2(	3(	4( 5( )
[2]「母」と自分との関係をイメージして自由に絵に描いてください。そして簡単に説明を加えてください。			

図1 (調査用紙)

### Ⅳ. 結果

①総回収数は男子341名、女子369名であった。その内回答数の少ないもの、明らかにふざけていると思われるものは除き、問1に8割以上答えているものを信頼性があると考え調査対象者とした。

その結果男子142名（有効回収率41.6%）女子155名（有効回収率42%）で、年齢は18才から21才であった。②整理方法は、男女別にそれぞれの語に対して、一位から五位までそれぞれに合計し、ひとつの語の合計数は調査対象者数全体を100としてパーセントで表わした。従って、その数字は一つの語について、一位であるか五位であるかは関係なく何%の人がその語を答えたかを表わしている。同じ語をふたつ以上の順位にあげている場合は上位のみを採用した。また、形容詞の「ずるい」と「せこい」、「暖かい」と「温かい」と「あたたかい」、名詞の「はれ」と「晴天」と「青空」、動詞の「話す」と「しゃべる」は同一語として計算した。明らかな品詞の間違い（例えば、名詞のところに「やさしい」と記述したものなど）が数例あったが、それはその語のみ除外した。③問1の品詞、問2のイメージ画と両方施行したうち、今回は品詞の分析結果の部分を報告する。④結果は表1～8までである。

## V. 考察

### <各品詞に表現されたイメージの特徴>

[形容詞] 男女合計すると297名のうち242名（83.2%）の人が「やさしい」という表現を使っている。しかも、一番強いイメージとして「やさしい」をあげた人は151名（38.7%）である。これは多くの母親が「やさしい」とイメージされていると考えて間違いではない。その上、「強い」が男子40.8%で二位に、女子では51.0%で三位に、「あたたかい」が男子36.6%で三位に、女子59.4%で二位となり、青年期を迎えた若者にとって母親はやさしさ、あたたかさ、強さをもった肯定的イメージとしてとらえられているといえる。しかし、「やさしい」「あたたかい」が、「強い」と同列に扱えるかどうかは疑問である。子供にとって、母の強さは子を束縛する強さかもしれないし、むしろ、「きびしい、こわい」に通じるイメージともとれる。しかも男子では四位から九位までに

「うるさい（33.3%、きびしい（23.2%）、こわい（19.0%）、うっとうしい（12.7%）、しつこい（9.2%）」というイメージが含まれ、女子でも、4位に「きびしい」（40.3%）、6位に「うるさい」「こわい」（23.2%）となり、肯定的と同時に、否定的イメージも強いことがわかる。

特に男子の場合には肯定的イメージが、数も多く上位にあり、ことばの意味も、「うるさい、うっとうしい、しつこい、やかましい」など、浸入的、感情的である。これに対して、女子では103の種類の形容詞のなかで、「やさしい、あたたかい」以外にも「大きい、明るい、おもしろい、たのしい、やわらかい、広い」など肯定的イメージのことばが圧倒的に多く、表現した人数も多い。又、「大きい、広い」という大らかなイメージは女子では5位（26.5%）と12位（11.6%）に対して、男子では9位（9.2%）と28位（2.8%）とぐっと低くなる。あるいは信頼の具体的表現である「たくましい、たのしい」は女子では15位（6.5%）、16位（5.8%）とランクされるのに、男子では「たのしい」が18位（4.9%）「たくましい」が22位（4.2%）と、女子より共に低くなる。ところが、「すごい、えらい」といった絶対的な力を表現し、かつ肯定否定の両面を持つことばでは、男子が13位、15位となり、女子の21位、24位より上位にくる。これは、女子の場合同性であるために、母親は具体的身近な理解者として存在するのに対して、男子の場合、理解しがたいすごさや、偉大さを感じるためではないだろうか。具体的な母の存在という意味では「いそがしい」が女子では13位（9.7%）と高く、男子では22位（4.2%）となっていることから、女子にとっては身近な存在であることが理解できる。一方、「つらい、かなしい、苦しい」が男子では17位（5.6%）、28位（2.8%）、33位（2.2%）とランクされるのに、女子では共に最下位（0.6%）にすぎない。これは、母の存在を男子の場合は情緒的に悲しさやつらさ、苦しさとしてとらえ、社会的弱者としてみる傾向



があることを示す数字ということができるであろう。

〔副詞〕 副詞は男子240種類、女子193種類に及び、一位から最下位までの%の差が少なく、大きな特徴をあげることがむつかしい。しかし、男子で一位(23.9%)の「がみがみ」は二位(11.3%)の「ふわふわ」と大きな差があり、しかも女子では五位にしか入ってこないことを考慮すると、何か男子のイメージの特徴を表わしていると考えられる。その上、「がみがみ」以外にも「きびきび」「せかせか」「どんだん」「はきはき」「かりかり」「せっせっ」「くどくど」「ぎゃあぎゃあ」「さっさっ」「かんかん」と25種類中10種類の言葉が、ゆったりとして暖かさや、静かに見守る落ち着いたきといったイメージと対照的である。これは男子の場合青年期に達しても、母親は口やか

ましく叱り付けたり、きぜわしく追い立てる存在なのかもしれない。あるいは幼い頃のイメージをそのまま引きずっていると考えるべきであろうか。それに比べて、女子では一位が「ふわふわ」二位が「にこにこ」三位「ぼかぼか」と上位につづき、他にも「ほかほか」「ゆらゆら」「ぬくぬく」「きらきら」「ほのぼの」「げらげら」「ころころ」と、27種類の内10種類が暖かく、明るいイメージの語である。もっとも男子の方にも明るく暖かなイメージの語「ふわふわ」「ぼかぼか」「にこにこ」といった語があがってきており、女子にも「きびきび」「がみがみ」「せかせか」「はきはき」「しゃきしゃき」「ばたばた」「どんだん」「さっさっ」など、気忙しく追い立てられるイメージの言葉が入ってきており、男女共肯定否定の両面のイメージがあることは疑いない。

順位	形容詞 男子(141種類)	合計人数(%)	1	2	3	4	5
1	やさしい	110(77.5%)	5	7	2	6	7
2	強い	58(40.8%)	1	7	8	1	3
3	暖かい	52(36.6%)	8	2	1	1	2
4	うるさい	47(33.1%)	9	1	2	1	1
5	厳しい	33(23.2%)	3	5	1	2	1
6	こわい	27(19.0%)	4	6	4	4	9
7	うとうしい	18(12.7%)	5	2	3	3	5
8	明るい	14(9.9%)	1	2	5	3	3
9	しつこい	13(9.2%)	2	4	3	2	2
9	弱い	13(9.2%)	0	4	5	2	2
9	大きい	13(9.2%)	3	3	2	1	4
9	小さい	13(9.2%)	5	3	1	1	3
13	太い	12(8.5%)	1	4	0	2	5
13	やわらかい	12(8.5%)	2	5	3	0	2
15	すごい	11(7.7%)	0	2	1	5	3
15	えらい	11(7.7%)	0	0	3	1	7
17	つらい	8(5.6%)	2	4	1	1	1
18	やかましい	7(4.9%)	2	0	2	3	0
18	たのもし	7(4.9%)	1	2	0	1	3
18	楽しい	7(4.9%)	1	1	0	3	2
18	すばらしい	7(4.9%)	0	0	1	3	3
22	美しい	6(4.2%)	1	1	1	1	2
22	忙しい	6(4.2%)	0	2	2	2	0
22	たくましい	6(4.2%)	0	3	1	1	1
22	きれ	6(4.2%)	0	1	4	1	0
26	ずる	5(3.5%)	3	0	0	2	0
26	かた	5(3.5%)	2	1	1	1	0

表1 (形容詞 男子)

順位	形容詞 女子(103種類)	合計人数(%)	1	2	3	4	5
1	やさしい	132(85.2%)	5	8	3	8	1
2	暖かい	92(59.4%)	3	0	2	8	5
3	強い	79(51.7%)	1	7	1	3	1
4	厳しい	47(30.3%)	2	8	1	4	1
5	大きい	41(26.5%)	5	1	2	7	8
6	こわい	36(23.2%)	4	9	8	6	9
6	うるさい	36(23.2%)	5	3	1	3	7
8	明るい	25(16.1%)	2	8	4	6	5
9	おもしろ	22(14.2%)	1	4	5	5	7
10	楽しい	20(12.9%)	0	4	3	9	4
11	やわらか	19(12.6%)	2	3	4	6	4
12	広い	18(11.6%)	2	3	2	3	8
13	忙しい	15(9.7%)	2	2	4	3	4
14	かわいい	11(7.1%)	0	0	3	2	6
15	たくまし	10(6.5%)	4	3	0	1	2
16	たのもし	9(5.8%)	2	3	1	2	1
16	弱い	9(5.8%)	1	0	1	3	4
18	まる	7(4.5%)	1	1	2	1	2
19	小	6(3.9%)	0	1	3	1	1
19	かしこ	6(3.9%)	0	0	0	3	3
21	え	4(2.6%)	3	0	0	1	0
21	白	4(2.6%)	1	1	1	1	0
21	きれ	4(2.6%)	0	0	2	2	0
24	美	3(1.9%)	0	0	0	3	0
24	やかまし	3(1.9%)	0	0	0	3	0
24	太	3(1.9%)	1	0	0	0	2
24	す	3(1.9%)	0	0	0	2	1

表2 (形容詞 女子)

しかし、どちらが強いかを比べてみると、男子には否定的イメージ、女子では肯定的イメージが強いことが認められる。これは男子の場合、日常的な身の自立が大学生になっても十分できていない場合が多く、「早く起きなさい」「早く寝なさい」「早く食べなさい」等と、今だに聞かされていることが想像される。もしかしたら「勉強しなさい」とさえ言われている学生もいるかもしれない。母親は子供の自立が遅ければ遅いほど過干渉、過保護になりやすい。あるいは、子供が自立しようとすればするほど、それを阻もうとする母親の心性に拍車を駆けるため、今まで絶対的であった母の存在が「がみがみ」とうるさく感じられるのであろう。それに比べて女子の場合、母親との同一視が早くから確立されるため、早い子供では小学生時代から身の自立の準備がなされ、大学生になれば完全に自立できることが多い。したがって母親との関係は友人関係に近いと考えられ、明るく暖かなイメージになるのであろう。

順位	副詞 野(240種類)	合計人数 (%)	1	2	3	4	5
1	がみがみ	34 (23.4%)	7	10	9	3	5
2	ふわふわ	16 (11.3%)	8	1	2	3	2
3	きびきび	15 (10.5%)	11	3	1	0	0
3	せかせか	15 (10.5%)	3	6	1	2	3
5	ぼかぼか	14 (9.9%)	3	4	2	4	1
6	どんだん	12 (8.5%)	1	4	1	2	4
7	だらだら	11 (7.7%)	3	2	5	0	1
8	さらさら	10 (7.0%)	1	2	3	3	1
8	にこにこ	10 (7.0%)	1	4	3	1	1
10	くーくー	9 (6.3%)	3	0	0	2	4
10	ぶよぶよ	9 (6.3%)	0	3	2	1	2
12	はきはき	8 (5.6%)	3	1	2	0	2
12	かりかり	8 (5.6%)	1	2	0	2	3
12	せっせっ	8 (5.6%)	0	2	2	3	1
12	いそいそ	8 (5.6%)	1	2	0	3	2
16	こまごま	7 (4.9%)	5	0	0	1	1
16	こつこつ	7 (4.9%)	5	0	0	1	1
16	くどくど	7 (4.9%)	1	4	2	0	0
16	ぎやぎやあ	7 (4.9%)	1	0	3	1	2
16	さっさっ	7 (4.7%)	3	0	0	2	2
21	ぶつぶつ	6 (4.2%)	0	2	2	2	0
21	さばさば	6 (4.2%)	0	2	2	1	1
21	がりがん	6 (4.2%)	1	1	1	2	1
21	すやすや	6 (4.2%)	0	1	3	1	1

表3 (副詞 男子)

また、「母」をイメージする場合、自分の「母」でもあるが、女子の場合は自分自身の「母」としての存在をイメージすることも可能である。それは「ふわふわ」「ころころ」「ぬくぬく」という表現がぬいぐるみや、赤ん坊をイメージしていることから推測することができる。

男女を通じていえることは、「きびきび」「はきはき」「しゃきしゃき」「せっせっ」「ばりばり」など主婦として能率的に働く母の姿をイメージさせる言葉も多く「すやすや」「ぺちゃぺちゃ」「ぐうぐう」など、ほほえましい日常的な生活者としての母の姿もとらえており興味深い。

[名詞] 名詞は男子238種類、女子217種類と、副詞同様種類が多く、極端な特徴を見いだすのはむづかしい。むしろ名詞では男女の差が興味深い。男子では一位から「海 (21.2%)、台風 (16.9%、

順位	副詞 好(193種類)	合計人数 (%)	1	2	3	4	5
1	ふわふわ	44 (28.4%)	19	10	9	5	1
2	にこにこ	40 (25.8%)	10	11	8	8	3
3	ぼかぼか	36 (23.2%)	13	11	5	3	4
4	きびきび	34 (21.9%)	9	9	6	5	5
5	がみがみ	23 (14.8%)	4	7	5	9	9
6	せかせか	22 (14.2%)	5	6	5	4	2
7	はきはき	18 (11.6%)	3	2	6	3	4
8	ほかほか	16 (10.3%)	7	4	1	1	3
9	しゃきしゃき	15 (9.7%)	5	3	2	4	1
9	さらさら	15 (9.7%)	5	1	0	4	5
11	ばたばた	13 (8.4%)	4	2	1	4	2
12	てきぱき	12 (7.7%)	2	3	2	2	3
13	どんだん	11 (7.1%)	1	2	2	5	1
14	ゆらゆら	10 (6.5%)	0	2	2	5	1
15	ぬくぬく	9 (5.8%)	3	4	0	2	0
16	きらきら	8 (5.2%)	1	1	2	2	2
16	さっさっ	8 (5.2%)	3	1	1	2	1
16	ぺちゃぺちゃ	8 (5.2%)	2	2	0	1	3
16	そわそわ	8 (5.2%)	0	1	0	2	5
20	こつこつ	7 (4.5%)	2	2	1	1	1
20	とんとん	7 (4.5%)	3	0	1	2	1
20	ほのぼの	7 (4.5%)	1	1	4	1	0
20	ぐうぐう	7 (4.5%)	1	1	0	1	4
20	ぶりぶり	7 (4.5%)	0	3	0	1	3
20	げらげら	7 (4.5%)	0	0	2	2	3
20	ころころ	7 (4.5%)	0	0	0	3	4
20	ばたばた	7 (4.5%)	0	1	1	2	3

表4 (副詞 女子)



嵐を加えると20.4%)、雷 (15.5%)、ひまわり (15.5%)、太陽 (14.8%)」という順位に対して、女子では「太陽 (31.3%)、海 (20.7%)、ひまわり (18.3%)、風 (16.2%)、木 (16.2%)」となり、男子では台風や雷といった激しく破壊的なイメージが上位に上がってくるのに対して、女子では太陽やひまわりといった、明るく晴れたイメージが先に上がってきている。しかも海の深さを考えると、男子にとって母の存在は破壊的で、呑み込まれるほどの強さや激しさと感じられるのかもしれない。それに加えて、うっとうしさをイメージする「雨」や、行く手を遮る「川」が男子では20位以内に入ってくるが、女子では「雨」が32位、川は50位以内にも入ってこない。これらを考えると男子にとっては母は否定的なイメージが相当強いと言い得るであろう。しかし、雨は大地に潤いを与えるものでもあり、川は豊かな実りを運ぶものでもあることを考えると一概に否定的に解釈するのも問題であろう。また、太陽は暖かさや明る

順位	名詞 男子 (238名)	合計人数 (%)	1	2	3	4	5
1	海	3.0 (21.2%)	1.1	9	6	4	6
2	台風	2.4 (16.9%)	8	6	6	3	1
3	雷	2.2 (15.5%)	5	6	2	4	5
3	ひまわり	2.2 (15.5%)	5	5	3	7	2
5	太陽	2.1 (14.8%)	3	7	3	4	4
5	犬	2.1 (14.8%)	7	4	6	4	0
5	牛	2.1 (14.8%)	4	7	3	4	3
8	雲	1.5 (10.6%)	3	1	3	2	6
9	風	1.4 (9.9%)	0	3	4	4	3
10	空	1.3 (9.2%)	1	1	3	5	3
11	大地	1.2 (8.5%)	4	5	0	0	3
12	山	1.1 (7.7%)	0	2	2	3	4
13	川	1.0 (7.0%)	1	3	1	4	1
13	月	1.0 (7.0%)	5	0	2	2	1
15	雨	9 (6.3%)	4	4	2	0	1
15	さる	9 (6.3%)	2	1	1	4	1
15	ねこ	9 (6.3%)	1	2	1	0	5
18	草	8 (5.6%)	1	1	0	5	1
18	バラ	8 (5.6%)	0	0	1	4	3
18	車	8 (5.6%)	1	0	1	3	3
21	木	7 (4.9%)	4	0	1	2	0
22	ぞう	6 (4.2%)	3	0	0	2	1
22	花	6 (4.2%)	2	2	0	1	1
22	熊	6 (4.2%)	1	0	5	0	0

表5 (名詞 男子)

さをイメージすると同時に、近づくと焼け焦げるほどの熱さ、激しさももっている。しかもひまわりが太陽のイメージと近いことを考えれば、女子にとっても肯定的なイメージだけではなく、太陽の持つ強さ、激しさ、呑み込まれそうな海の深さもイメージしているといわねばならない。

男女で共通して言えることは、地球を取りまき人間を育むイメージを持つ「太陽、海、大地、空、山、月、風」は男女とも20位以内に入ってきており、母のイメージとして適切なもののようである。しかし、「太陽、海、大地」が一番目、二番目にイメージされるのに対して、「山、風、空」は4番目、5番目にイメージされているのが特徴的である。

動物では、「犬」が男女とも上位に上がってきている。これは身近にいて、よく吠える存在であ

順位	名詞 女子 (217名)	合計人数 (%)	1	2	3	4	5
1	太陽	6.8 (31.3%)	1.7	1.5	1.1	2	5
2	海	4.5 (20.7%)	1.2	9	1.4	6	4
3	ひまわり	2.6 (18.3%)	7	6	8	3	2
4	風	2.3 (16.2%)	5	5	2	2	9
4	木	2.3 (16.2%)	1.5	5	2	4	7
6	大地	2.2 (15.5%)	6	5	7	1	3
7	ぞう	2.0 (14.1%)	5	3	3	7	2
8	空	1.7 (12.0%)	3	1	6	1	6
8	たんぽぽ	1.7 (12.0%)	3	4	3	6	1
9	雷	1.6 (11.3%)	0	3	1	8	4
10	犬	1.5 (10.6%)	7	2	2	3	1
11	山	1.4 (9.9%)	0	3	5	6	0
11	月	1.4 (9.9%)	0	3	3	7	1
13	晴れ	1.3 (9.2%)	3	3	3	3	1
14	パンダ	1.2 (8.5%)	6	1	3	1	1
15	うさぎ	9 (6.3%)	4	2	2	1	0
15	くま	9 (6.3%)	2	4	1	1	1
15	牛	9 (6.3%)	2	1	1	2	3
15	草	9 (6.3%)	1	3	1	2	2
19	ライオン	8 (5.6%)	2	5	0	2	1
19	空気	8 (5.6%)	1	2	2	0	3
19	家	8 (5.6%)	0	2	3	2	1
19	花	8 (5.6%)	2	4	1	0	1
19	さくら	8 (5.6%)	2	1	4	1	0
24	馬	7 (4.9%)	2	1	0	2	2
24	嵐	7 (4.9%)	0	2	1	3	1
24	雲	7 (4.9%)	1	2	0	3	1

表6 (名詞 女子)

り、盲導犬に代表される忠犬でもあり、家を守る番犬でもあるだろう。「牛」もまた男女とも上位に入ってきているが、これはミルクを与えるものであり、どっしりとした大きな存在であろうし、その意味では「象、くま、ライオン、とら」等もその存在の大きさが母と重なると考えられるであろう。反対に、「さる、ねこ、うさぎ、パンダ」等は身近な可愛らしい存在ととれるであろう。

「花」は種々さまざまな名前があげられているが、ひまわりを含めて花全体として合計すると第一位になる。しかし、いずれも一番目にイメージされるよりも二番目以降にイメージされることが多く、花の持つイメージは母のイメージの、ある一面を表現するのにふさわしいといえるであろうし、個々の種類の花が持つイメージが個々の母親のイメージとして受けとってよいのではないだろう。

順位	動詞 男子(153名)	合計人数(%)	1	2	3	4	5
1	寝る	59 (41.5%)	7	12	14	17	9
2	働く	54 (38.0%)	33	10	5	2	4
3	話す	37 (26.1%)	4	5	5	6	4
4	食べる	34 (23.9%)	2	10	12	4	6
5	動く	28 (19.7%)	13	9	1	4	1
5	怒る	28 (19.7%)	8	5	8	6	11
7	走る	23 (16.2%)	8	5	7	2	1
8	笑う	22 (15.5%)	5	5	7	5	0
9	叱る	18 (12.7%)	6	2	5	3	2
10	泣く	16 (11.3%)	0	2	4	1	9
11	作る	14 (9.9%)	3	5	3	7	3
12	守る	10 (7.0%)	5	1	1	1	2
12	歩く	10 (7.0%)	3	3	2	1	1
14	見守る	9 (6.3%)	2	1	2	2	2
14	たたく	9 (6.3%)	2	1	2	1	3
14	喜ぶ	9 (6.3%)	0	4	2	3	0
14	洗う	9 (6.3%)	4	2	1	2	0
14	育てる	9 (6.3%)	1	2	4	1	1
19	支える	8 (5.6%)	1	2	2	1	2
20	遊ぶ	7 (4.9%)	2	2	0	3	0
20	料理する	7 (4.9%)	0	1	2	3	1
20	頑張る	7 (4.9%)	2	1	1	2	1
23	すわる	6 (4.2%)	2	1	0	0	3
23	ほめる	6 (4.2%)	2	1	1	1	1
23	だく	6 (4.2%)	1	2	0	1	2
23	見る	6 (4.2%)	0	0	2	1	3
23	起きる	6 (4.2%)	0	1	2	1	2

表7 (動詞 男子)

うか。

その他、男子で「車」が18位、女子で「家」が19位に上がっている以外は、文明の産物は20位以内に入っていない。これは「母」の存在が、「自然」に近いものとしてイメージされているためではないだろうか。つまり、時には暖かく育む「太陽」であり「大地」であり、ときには飲み込むほどの深い「海」であり「嵐」であり、人々をなくさめる「木」や「森」や「月」や「空」であり、つよい「動物」や、美しい「花」といった、多種多様な自然のイメージであると言えることができるであろう。

〔動詞〕 動詞では「働く、動く、作る、洗う、料理する、洗濯する、掃除する、買物する」など、「働く人」としてイメージした語が上位に並ぶのが大きな特徴である。特に「働く」と「動く」は

順位	動詞 女子(131名)	合計人数(%)	1	2	3	4	5
1	働く	65 (41.5%)	36	7	8	7	7
2	笑う	60 (38.7%)	14	14	11	14	7
3	寝る	59 (38.1%)	4	11	15	16	13
4	怒る	53 (34.2%)	5	7	19	11	11
5	話す	45 (29%)	3	8	10	9	15
6	動く	32 (20.6%)	14	12	2	0	4
6	食べる	32 (20.6%)	3	5	11	6	7
8	守る	25 (16.1%)	14	2	5	1	3
9	歩く	21 (13.5%)	5	6	1	4	5
10	育てる	19 (12.5%)	2	10	3	3	1
11	走る	18 (11.6%)	10	3	2	3	0
12	泣く	17 (11.0%)	0	1	3	5	8
13	ほめる	15 (9.7%)	0	3	3	2	7
14	料理する	13 (8.4%)	2	2	3	5	1
15	作る	12 (7.7%)	4	3	4	1	0
16	洗う	11 (7.1%)	0	9	0	0	1
16	そうじする	11 (7.1%)	2	1	4	2	2
16	包む	11 (7.1%)	1	4	4	0	2
16	しかる	11 (7.1%)	3	1	2	3	1
20	遊ぶ	10 (6.5%)	0	3	2	2	3
21	頑張る	8 (5.2%)	3	3	0	1	1
21	教える	8 (5.2%)	0	2	4	0	2
23	生きる	7 (4.5%)	4	0	2	1	0
24	安らぐ	5 (3.2%)	1	1	1	0	2
24	見る	5 (3.2%)	0	1	0	3	1
24	愛する	5 (3.2%)	0	0	2	0	3
24	買物する	5 (3.2%)	0	1	1	2	1

表8 (動詞 女子)



第一番目にイメージした人が男子では33名(23.3%)と13名(9.2%)女子では36名(23.2%)と14名(9.0%)と、他の語に比べて圧倒的な数になると同時に、「寝る、しゃべる、食べる、走る、笑う、歩く」など生活者としてのイメージも上位に入ってくる。これらのことは青年期の子供たちにとって母はまず「働く人」とイメージしていることができる。「働く」を単に主婦労働ととるか、広く「仕事」としてとるかは問題であるが、子供たちの目にうつる母はおそらく主婦としての姿であろうし、子のために献身的に働く母のイメージを描いているであろうことは想像に難くない。しかし、青年期の子を持つ相当数の主婦がパート労働者であることを考慮すると、主婦として家族の生活をささえながら、一方でパートで忙しく働く母をイメージしているのかもしれない。そして、そういった働く母が同時に、よく「寝る、しゃべる、食べる」といった生活者としてイメージされるのは当然のことである。これは、子供が青年期に達すると母の姿を相当客観的に見つめるようになり、直接的な自分との関係としてとらえるのではなく、自分と切り離れた「母」としての存在をイメージしていると考えられる。従って「見守る、育てる、包む、支える、ほほえむ」といった養育者としてのイメージは低くなるのであろう。もし、乳幼児期や、少年期の子供に適切な言語化が可能であれば、こういった養育者イメージの言葉がより多くでてきたかもしれない。少なくとも青年期の若者にとっては、母イメージは決して崇高でも宗教的でもなく、きわめて現実的なイメージが強いと断言できる。しかし、それは質問の仕方が「母の行動」としたこと大きく影響されている可能性も十分考え得る。もし「母との関係」とすれば、もっと別の語が上位に上がってきたかもしれない。とはいえ、どこまでも「母イメージ」を要求したのであり、それを自分との関係としてイメージするか、より客観的な存在としてイメージするかは、母子関係の在り方や、イ

メージする人の思考パターンに左右されるはずである。実際に、関係をイメージした言葉も相当上がってきており、男子では「怒る、叱る、守る、見守る、たたく、育てる、支える、ほめる、だく」など、女子では「怒る、守る、育てる、ほめる、包む、叱る、教える、愛する」等で、いずれにしても、絶対的な崇高さや、献身的イメージのみでなく、否定的イメージの語も含まれている。特に男子の場合は、「怒る」が5位(19.7%)、「叱る」が9位(12.7%)と肯定的な語よりも上位にくる。これは副詞と同様、男子に対する母親の過干渉、過保護の姿をとらえたものと考え得る。

#### <母イメージの特徴と母イメージが病むこと>

四種類の品詞を通じて言えることは、「母」イメージは多種多様な言葉で表現されることである。言い換えれば百人寄れば百種類の、千人寄れば千種類のイメージが存在するといって過言ではない。特に男子は全品詞を通じて多種類の言葉をあげており、母に対する見方や、関係が女子よりも複雑なのか、異性であることが不可解さを増大させ、イメージを多様化させたと考えられる。

内容的には、「やさしさ、暖かさ、明るさ、強さ」といった肯定的イメージと同時に、「うるささ、厳しさ、恐ろしさ」といった否定的イメージが認められる。しかし、男女別に見てみると、女子には全品詞を通じて肯定的イメージが強いのに対して、男子では、形容詞で「やさしい、強い、暖かい」と肯定的なイメージがつづくが、次には「うるさい、厳しい、こわい、うっとおしい」とつづき、名詞で「海、台風、雷」の順になり、副詞で「がみがみ」が第一位になり、否定的イメージが相当強いことがうかがわれる。このように大学生の母イメージは内容的には大きな差が見られないが、強さにおいては明らかな男女差が認められる。とはいえ、男女の全品詞を通じて、肯定的なイメージも否定的なイメージもあがってきており、この結果で見る限り、日本の社会が持つ絶対

的愛を捧げる母イメージとは大きなギャップがあることは間違いなく、母イメージの病は相当深刻といわねばならない。

ところで、この結果にあらわれた母イメージを考えてみると、C. G. ユング(1938)が母親元型としてあげた種々のイメージを思い出させる。ユングは昔話や神話、あるいは心理療法を受ける患者の夢や妄想に共通の典型的イメージがあることを見だし、人類共通の普遍的無意識の存在を提唱し、その根底には数種の元型があると主張した。その元型の一つとして「母親元型」をあげ、その特性は「母性」であるとして「やさしく、かつ恐ろしい」面を持つすべてのイメージであるとしている。

河合隼雄(1982)は、日本の昔話で、母親の否定的な側面が強調されるのは、日本の社会が母親の肯定的側面を強調するため、それを補償する機能として、否定的側面を生き生きと描きだしたものであると主張している。ところが、明治以降そういった否定的側面を生き生きと描いた昔話さえも教訓的に書き替えられ、社会が持つ母イメージは歪められてきたと思われる。又、河合(1991)は醜貌恐怖に悩む人の例をあげて、イメージの重要性についてのべている。つまり、醜貌恐怖の場合、実際の顔の形が醜いか醜くないかが問題ではなく、「自分が他人にどのようにイメージされているか」とか、「自分にとって自分のイメージがどのようなものであるか」が、その人が生きていく上で一番大切なことである。母親の場合であれば、母親自身が「母をどうイメージするか」とか、母親をとりまく人たちに「母がどうイメージされているか」が、母親を生きやすくさせるか、生きにくくするかを決定するといえる。

ところが、母性重視の文化を持つ日本の社会では、多くの母親や母親を取り巻く多くの人たちが「子のために無限の愛を提供する」という母イメージをいつのまにか作り上げてしまっている。しかもそのことは明治以降良妻賢母とか、軍国の

母として政策的に操作された結果であり、古来より日本人が持つ自然な母イメージでは決してない。このような母イメージが「母」を生きにくくさせ、ひいては「子」が育ちにくくなり、種々の病理現象の一因になっていることは間違いない。しかしこの場合、「母」が病んでいるとかがえてはならない。母を生きにくくさせているものがあるとすればそれが病んでいる。つまりこの社会が持つ「母イメージが病んでいる」と考えるべきである。そこで、母を生きやすくするためには、政策的に歪められた病んだ母イメージから解放され、より自由で自然な母イメージをこの社会が再イメージ化することが必要と思われる。本調査結果から見る限り、現実健康に育った若者たちが持つ母イメージは、「絶対的な愛や献身」といった崇高なイメージではなく、現実的で、肯定的側面と否定的側面をもっている。換言すれば、若者は崇高な肯定的イメージの中でのみ育ってきたわけではない。そこで、母親は母の否定的イメージをも「すべての母親が持つもの」として認め、社会も又「無限の愛を提供するもの」というイメージを母に背負わせる事無く、否定的側面も母の一面としてイメージ化することによって、母イメージは健康さを取り戻し、母親は生きやすくなり、結果的に子どもたちも健康に育つことができるのではないだろうか。

## VI. おわりに

学生相談室紀要の創刊号が刊行されるにあたって、青年期の問題を取り上げるつもりでペンを進めてきたが、振り返ってみると「母」の問題を扱っており、いつまでたっても「母」にこだわり続けている自分に苦笑してしまう。

しかし、日々学生相談室を訪れる学生と向き合うとき、彼らがどう育てられてきたかを考えざるをえない。又、彼らが自らをどのようにイメージするかと同様、母や母との関係をどのようにイメージするかは悩みの解決の一つの大きな鍵であ



る。又、彼らが社会という大きな器のなかで育つとき、社会の持つ母イメージや、母的機能である母なるもののイメージは重要である。そのためには、母自身が母をどうイメージしているかを知ること必要であろう。次の課題として母親に対しても調査を行ない考察を試みたい。又、社会の操作に流されることのない自然な母イメージと、ユングの母親元型との関連についても、種々の文献を紐解き、十分検討する必要があるだろう。

最後にこの論文作成に四苦八苦している筆者を、適切な助言によってどうにか完成にこぎつけさせてくれた、文学部高石恭子講師に心からお礼を言いたい。又、遅々として進まぬ原稿を辛抱強く待ちつづけ、励ましてもらった学生相談室スタッフ、調査に協力してくれた大勢の学生にも深く感謝したい。

#### 文献

1. 東山弘子・渡辺寛(1993)：母をなくした日本人。春秋社。
2. 山村賢明(1970)：日本人と母、文化としての母の観念についての研究。東洋館出版社。
3. 三木アヤ(1981)：女性の心の謎、グレートマザーと日本の母性。太陽出版。
4. やまだようこ(1987)：私をつつむ母なるもの、イメージ画にみる日本文化の心理。有斐閣。
5. Louis Genevie, Eva Margolies (1987)：THE MOTHERHOOD REPORT. Macmillan Publishing Company 浅井美智子他訳(1989)：母親。朝日新聞社。
6. 大日向雅美(1988)：母性の研究。川島書店。
7. 大日向雅美(1992)：母性は女の勲章ですか？。産経新聞社。
8. Carl. Gustav. Jung(1938)：Die Psychologischen Aspekte des Mutter-Archetypus. Erano s-Jahrbuch. 野村美紀子訳(1981)：ユングの象徴論，4心理学から見た母の元型。思索社。林道義訳(1982)：元型論，IV母親元型－その心理学との関わり。紀伊國屋書店。
9. 河合隼雄(1982)：昔話と日本人の心。岩波書店。
10. 河合隼雄(1991)：イメージの心理学。青土社。

---

#### ABSTRACT

##### The Mother Image of Adolescents

— Based on reseach to the college students —

SHIGEKO, Tomohisa  
Konan University

This paper examined the Mother Image in the normal adlescents. 142 male and 155 famale college students answered 4 parts of speech-----adjectives, adverds, nouns, and verds-----which reminded them of Mother. This data was analysed by number and different kinds. Also, it was differentiated by male and female.

The result showed varieties of images, positive and negative, between male and female student. The male students showed more negative images to mother, the female counterparts showed more positive images.

The result was also compared with the traditional Mother Image which was considered characteristics of Mother in Japanese society.

*Key Words:* mother image, adolescents, positive - negative

---